

特別記事

衛藤安奈君学位請求論文審査報告

本論文の構成

衛藤安奈君より提出された博士学位請求論文「一九二〇年代の中国労働運動の研究」の構成は以下のとおりである。

序章

- 一 本研究の問題意識
 - 二 先行研究
 - 三 研究対象について
 - 四 史料について
 - 五 本論文の構成
- 第一章 「原子化した社会」をめぐる諸理論
- 一 はじめに
 - 二 大衆社会論的アプローチと社会運動論的アプローチ
 - 三 「原子化した社会」をめぐる理論
 - 四 おわりに
- 第二章 中国における各労働者集団の一般的傾向
- 一 三つの解釈

- 二 団結する集団
 - 三 ルーズな集団
 - 四 瓦解する集団——広東と武漢の中小商工業者
- 第三章 広東労働運動（一）——広東労働者、党組織、「工賊」

- 一 広東労働運動をめぐる諸環境
- 二 広東における国共両党の党組織——一九二〇年～一九二七年
- 三 広東における国共両党の労働者組織——一九二二年～一九二六年

第四章 広東労働運動（二）——動員

- 一 党による労働者の動員（Ⅰ）——一九二二年
 - 二 党による労働者の動員（Ⅱ）——一九二四年
 - 三 党による労働者の動員（Ⅲ）——一九二五年～一九二六年
- 第五章 上海労働運動（一）——上海労働者、党組織、「工賊」
- 一 上海労働者をめぐる諸環境
 - 二 上海における国共両党の党組織——一九二〇年～一九二七年
 - 三 上海における国共両党の労働者組織——一九二四年～一九二五年
- 第六章 上海労働運動（二）——動員

- 一 党による労働者の動員 (I) —— 一九二三年
 - 二 党による労働者の動員 (II) —— 一九二五年二月
 - 三 党による労働者の動員 (III) —— 一九二五年五月以降
- 第七章 武漢労働運動 (一) —— 武漢労働者、党組織、「工賊」
- 一 武漢労働運動をめぐる諸環境
 - 二 武漢における国共両党の党組織 —— 一九二〇年～一九二七年
 - 三 武漢における国共両党の労働者組織 —— 一九二二年～一九二七年
- 第八章 武漢労働運動 (二) —— 動員
- 一 党による労働者の動員 (I) —— 一九二三年～一九二三年
 - 二 党による労働者の動員 (II) —— 一九二五年六月
 - 三 党による労働者の動員 (III) —— 一九二六年～一九二七年
- 終章
- 一 はじめに
 - 二 一九二〇年代の熱狂的労働運動に関する考察
 - 三 おわりに

本論文の概略

中国における労働運動の歴史は、一九九〇年代以降の日

本において、ほぼ打ち捨てられてしまった研究領域であるといつてよい。この間、利用可能な資料が増大したにもかかわらず、なぜそのような事態を招いたのか。それは、ひとつには、まさに参照すべき資料が膨大となったがゆえに、研究者たちが対象とすべき期間と地域を限定し、政治的・社会的・経済的動態を濃密に描き出すことに集中するようになったからである。そのような研究がしばしば他地域の研究との比較の視点を欠いたまま行われていることに対しては、研究者たちのなかに疑問が生じていなかったわけではないが、代替的研究戦略が発見できないのである。だが、より根本的な理由は別にある。それは、やがて中国における社会主義の成立に導く英雄的な労働者階級の運動という「革命史観」が批判されて以降、研究者たちがそれに代わりうる新たな解釈の枠組を構築できないでいるという点にある。

衛藤君の研究は、近年顧みられることのなかったこの研究領域に、新たな問題意識と方法論をもって果敢に挑んだものである。本研究の考察対象は、中国の労働運動がもつともはなばなしい展開をみせた一九二〇年代、とりわけ一九二一年から一九二七年に至る時期の広東、上海、武漢における労働者たちの運動である。衛藤君はこの時期の労働

者の歴史を、政治的に目覚めたプロレタリアートが階級的連帯に支えられながら自己救済に立ち上がる歴史（あるいは、その政治的反作用としての受難史）、もしくは中国共産党の支配を準備する歴史として描くのではない。本研究が一貫して注目しているのは、同時期において頻繁に生じた社会的混乱としばしば極端な暴力を伴った「労働運動」の実態、およびこうした状況が、いかに労働者たちと革命勢力との相互作用のなかで生み出されたかという点である。

この点を明らかにするために、衛藤君は当時の労働者たちが抱えていた社会的・経済的・文化的諸条件と、革命勢力による政治的動員が交錯する地点に観測台を設け、かつ社会心理学的アプローチを採用した。彼女が観察結果を解釈する際に手がかりとしたのは、W・コーンハウザーらの大衆社会論であった。すなわち、金融市場の崩壊に端を発する政治的・経済的・社会的な秩序崩壊のなかで、「原子化」された人々が、革命勢力による動員に直面した際の爆発的な反応として労働者たちの熱狂と暴力を描いたのである。それによって、本研究は「労働運動」を扱いながら、従来の中国労働運動史とは全く異なる色彩を帯びたものとして運動と社会の実態を描き出している。

各章の概要

序章において衛藤君は研究史を整理し、本研究の目的が、暴力的強制、私的利益の追求、社会的混乱などによって特徴づけられる一九二〇年代の中国労働運動の実態を解明し、中国の政治と社会をめぐる難問のひとつである暴力を伴う熱狂という社会現象の発生メカニズムと、その政治的意味を明らかにすることにあると述べている。

衛藤君による先行研究の概観によれば、一九二〇年代の中国労働運動史は、まず革命史という形で（共産党と国民党双方の）中国人革命党員の手によって記述された。政治的理由から、中華人民共和国では今なお、このような革命史の枠組から完全に自由な労働運動史を書くことは難しい。一方、戦後日本の中国労働運動史の研究の多くは、中国労働運動に体现されていると想定された民主主義の理想に共感し、日本にも同様の運動が起こると想定する立場に立つものであった。そのため、終戦直後から一九六〇年代まで、日本の中国労働運動史研究は中国共産党の革命史をそのまま受容する傾向があった。だが、一九七〇年代に入ると、文化大革命の惨状が日本にも伝えられるようになり、いかにして中国共産党の言説から距離を取るかが、中国労働運動史研究にとっての課題として浮上した。そして、中国で

改革開放が始まり、一九九一年にソ連が崩壊すると、中国労働運動史の根幹にあった物語自体が失われることとなり、一九八〇年代後半から一九九〇年代にかけて、日本における中国労働運動史研究は消滅へと向かったのであった。

英語圏における中国労働運動史研究の古典的著作は、フランス人研究者 J・シェノー (J. Chesneau) による *The Chinese Labor Movement 1919-1927* (一九六八年に英語版刊行) であるが、その後、中国労働運動史研究の中心地はアメリカへと移った。労働運動史研究に新しい潮流を拓いたニュー・レーバー・ヒストリー (New Labor History) と呼ばれる学派のなから、新たな中国労働運動史研究が生み出されていった。同学派には、労働者の主体性に着目するという特徴があり、この学派の流れを汲むアメリカの中国労働運動史研究もまた、中国共産党の正統革命史からはこぼれ落ちる傾向のあった労働運動や人々の動向に注目した。

しかし、以上の先行研究は革命史の生産に収斂する姿勢を脱せず、運動の水面下で進行していた各種の混乱や暴力の問題を軽視する傾向があったと衛藤君は指摘する。中国労働運動史の隣接領域である農民運動および市民運動に関する近年の研究は、いずれも当時の運動がいかに混乱し、

暴力に満ちていたかを語っている。そうであるなら、中国労働運動の実態とそれが政治秩序の形成に対してもたらした影響についても再考する必要がある、というのである。

衛藤君が考察の対象地域を広東、上海、武漢としたのは、少なくとも記録に残された限りにおいて、これら三地域において上記のような混乱がもつとも大規模かつ顕著に出現したからであった。またこれらの地域は、共産党と国民党による労働者の動員が積極的に行われていた場所でもあった。かくして、この研究の対象時期は、中国共産党組織が本格的に活動を始めた一九二一年から、同党が国民党によって都市を追われた一九二七年までに定められているのである。

第一章においては、衛藤君が依拠する理論的枠組が整理されている。ニュー・レーバー・ヒストリー学派は、研究史的にみると社会運動論の系譜を引いているが、本研究の基本的発想は、一般的には社会運動論と対立する傾向にある大衆社会論に依拠する。

大衆社会論的アプローチと社会運動論的アプローチの最大の相違点は、前者が「民衆のエゴイズムが公正な政治を歪める事態」を直視するのに対して、後者は「人々の連帯が政治を改善する力」になるとみなす点にある。衛藤君に

よれば、この二つのアプローチはともに人間の政治的可能性を捉えたものであるが、一九二〇年代の中国労働運動にひそむ暴力的強制の諸側面は、社会運動論的アプローチでは捉えられない。ここでは、大衆社会論の提示する「原子化した社会」に関わる知見が役立つという。

以上のように主張した後には、衛藤君は「原子化した社会」に関わる四つの次元、すなわちネットワークレベル、中間団体レベル、政治レベル、そして言説レベルの各々について、大衆社会論が与える説明を整理している。第一に、ネットワークレベルにおいては、このような社会に成立する「親分—子分関係」は、上—下、支配—服従、忠誠—叛逆、崇拜—侮蔑といった極端な対立軸によって特徴づけられるという。この人間関係は、規範も制度も乏しい流動的社会において、不確実性を防ぐために発達する人間関係であると考えられ、相互不信を根底に抱えており、外部世界に対して閉鎖的である。

第二に、上記のような「親分—子分関係」によって基礎づけられる中間団体は、他の中間団体とゼロサムゲームを展開することに熱中し、ますます「原子化した集団」になる傾向にあるという。このような対話可能性を欠落させた中間集団が数多く出現することは、社会全体を、多様性を

前提とする民主主義から遠ざけてしまう可能性が指摘されている。

第三に、「原子化した中間団体」が生み出す政治は公的なものと無関係で、そこでの「政治化」とは人々が政治的社会的問題を改善することを可能とするものではなく、「ある問題が政治闘争に利用される状態」を指す。つまり、ここでは、政治に関わろうとする意思是、「そのまま私的利益を求める利己的なものと見なされる」というのである。

最後に言説レベルでは、「敵」を設定する「正義」の言説が重要である。この種の「正義」の言説は、その方向性次第では、社会的承認の追求と私的利益の追求との共生関係を生み出すことを可能とする。それゆえ、「原子化した中間団体」に対し、彼らの利益に沿う形で「敵」を設定する「正義」の言説が与えられると、爆発的に私的暴力が拡大するという。

第二章では、主要な労働者集団の性格と集団内部の人間関係が検討されている。主要な労働者集団とは、広東人機械工、広東人海員、長江沿岸の港湾労働者、鉄道労働者、租界サービス業労働者、外資系工場労働者、広東と武漢の中小商工業者である。

労働運動史の領域においては、運動発生要因に関し、大

きく分けて三つの解釈が行われてきた。すなわち、貧しさゆえに人々は立ち上がったとする解釈、団結して戦う術を伝統的文化のうちに培ってきた労働者集団が立ち上がったとする解釈、そして運動の理念が広範な社会層の不满をよく汲み上げたために運動が発生したとする解釈である。

だが、衛藤君がみるところ、労働運動に積極的に参加した人々は、必ずしも最貧の人々ではなく、経済的には比較的余裕があった工頭と呼ばれる人々であった。また、運動に熱狂する傾向があった下層社会の人々は、都市へ流入した農村出身者のなかでも農村社会との絆がとりわけ希薄化した人々、したがって伝統的文化の直接の継承者とは想定しにくい人々であった。さらに、運動を牽引していた社会集団は、数量的にいえば決して社会の多数派を形成する人々ではなかった。

そこで衛藤君は、運動の発生要因を上記の三解釈ではなく、各集団が備える集団としての性格に求める。すなわち、広東人機械工、広東人海員、長江沿岸の港湾労働者、鉄道労働者の集団には、外敵と戦う戦闘集団としての性格、集団内部の上位者が下位者から搾取する収奪集団としての性格、さらに請負業者が会社との契約に基づき労働者を供給・管理する労務管理団体としての性格を見出すことがで

きるという。このような集団は「親分—子分関係」を基礎とする「純粋な男性共同体」であり、外部との対話性も欠落していたという。

一方、運動に消極的であった集団としては、租界サービス業労働者や外資系工場労働者を見出せるという。前者には、雇い主たる外国人の言語・文化に精通した特殊技能労働者としての側面があり、また彼らの雇用主は外国人であるがゆえに、中国社会に自生する濃厚な「親分—子分関係」の支配から比較的自由であった。だが他方で、その団結力、自衛能力は低く、外部から容易に動員される傾向があった。一方、後者は、濃厚な「親分—子分関係」に支配されてはいたが、港湾労働者などもっとも戦闘的な集団と比較するとルーズな集団であり、外部から動員されるケースが多いという。

最後に、広東と武漢の中小商工業者団体に所属する店員と労働者について、彼らが本来的には熱狂的運動に対して消極的な人々であると想定できるにもかかわらず、なぜ積極的参加者として姿を現すことになったのかが述べられている。それは、各中小商工業者の工場、店舗に雇われている彼らに与えられる給料が不十分であり、下位者からの中間搾取や店の名義を用いた私的商売によって収入を補うこ

とを余儀なくされていたこと、そして彼らの立場が一年契約を繰り返す不安定なものであったことによるといえる。政治勢力の動員による労働運動が地域の経済を損なうと、倒産の危機に直面した中小商工業者は店員を解雇しようとし、失業の危機にさらされた店員は、熱狂的な運動の支持者へと転じたのであった。

第三章では、広東の労働運動をめぐる諸環境が検討された後、現地における国共両党の労働者組織である広東人海員組織、広東総工会、広東工会連合会、広州工人代表会、沙面ストライキ委員会、省港罷工委員会のそれぞれの成立経緯や組織の成員の社会的背景が語られている。衛藤君は、まず広東においては「強壯な成人男性」を主体とする流動人口が多く、その一部が海外に展開し、海員集団を形成していたこと、またこのような人々を洪門と呼ばれる「親分―子分関係」のネットワークが支配していたことを指摘している。

次に衛藤君は、のちに中国共産党から「工賊」（裏切り者労働者を意味する政治的レッテル）あるいは国民党右派などと呼ばれることになった人々、とりわけ国民党の広州市特別市党部に結集した人々、ならびに労働者動員組織においては広東機器工会や広東総工会に結集した人々の党派

的背景を明らかにしている。後者はとくに馬超俊、黄煥庭といった広東人機械工出身の国民党員（衛藤君は彼らを広東機器工会派と呼ぶ）が指導権を握っており、最終的には共産党系の労働者動員組織と武力紛争を展開するに至ったのである。

さらに衛藤君は、国共両党が形成した労働者動員組織の協力・対立関係を詳細に分析し、労働者の動員をめぐる共産党と対立した広東機器工会派の動きと、同党の動員に応じた労働者集団の背景を明らかにしている。衛藤君によれば、一九二五年五月に共産党が開催を呼びかけた第二次全国労働大会において「工賊」とされた人々は、そのほとんどが広東、武漢、上海の三地域において、共産党との協力を拒み、広東機器工会派と何らかの形で関わりをもった人々であった。一方、同党の動員に積極的に応じたのは、搾油機の導入によつて失業の危機にさらされた搾油労働者の集団の頭目など、その社会的地位が揺らいでいる労働者であったという。

第四章では、国民党と共産党による広東労働者の動員の様子が検討されている。衛藤君はまず一九二二年の香港海員ストライキの積極的参加者が、競合相手に仕事を奪われかけている海員工頭（海員宿舎の経営者）や、自らの社会

的地位の上昇を狙う工頭であったことを明らかにしている。一方、運動に対して消極的態度を示していた人々は、とくに租界サービス業労働者であり、彼らに対しては、殺人、脅迫などの手段で強制的なストライキ参加要請が行われていたという。衛藤君によれば、ストライキは社会の最貧困層に大きな負担を強いるものであったが、結果は成功であったと関係者に認識されたため、香港海員ストライキはこれ以降、共産党のストライキ戦略のモデルとなったのであった。

続いて、一九二四年の沙面ストライキの中核となったのが青年サービス業労働者と失業海員であったことが指摘されている。衛藤君のみるところ、これら積極的参加者の態度には、E・フロムが指摘した「権威主義的態度」に通じる要素が認められる。つまり、彼らは一方で権威をたたえ、これに服従しようとするが、他方では自ら権威になり、他者を服従させようとする態度を示したというのである。

さらに衛藤君は、一九二五年から翌年まで続いた省港ストライキは、時間とともにその性格を変えた複雑な性格をもつものであったこと、労働者をストライキに参加させるために、脅迫や殺害といった「圧力」がかけられたこと、さらに、ストライキが失業者を養う運動という側面を帯び

てしまったことにより、広東国民政府関係者がストライキ収束に苦勞したことを明らかにしている。初期の積極的参加者として現れるのは、社会的地位の上昇を狙う香港下層社会の手工業者・飲食業者の頭目であるが、ストライキが進展すると、香港を中心として発達した水上運輸業の関係者もまた一斉に失業し、少ない市場のパイを奪い合う港湾労働者同士の武力紛争は深刻さを増した。さらに、長期化したストライキが中国の伝統的な契約更新時期にあたる旧正月をまたぐと、不況に陥った広東の中小工業者が店員や労働者を解雇する動きが相次ぎ、失業者が増加した。すると、失職した店員・職人が、運動に対する積極的参加者へと転じ、暴力を伴う混乱がさらに深まったのであった。

さらに興味深いことに、以上のように変質してしまつたストライキを解除するには、ストライキ労働者や糾察隊員に対する「解散費」が必要であった。というのも、「解散費」なくしてストライキを解除すれば、労働者や糾察隊員が敵側に寝返る可能性があつたからである。そのため、省港ストライキの終了が正式に宣言されても、労働者の集団は、一九二七年一〇月、国民党左派の領袖であつた汪精衛によつて強制的に解散させられるまでストライキを継続したのであった。

第五章においては上海における労働運動をめぐる諸環境が述べられ、次に上海における国共両党の党組織が検討されている。さらに、上海における国共両党の労働者組織として、滬西工友倶楽部、工商学連合会と上海総工会、上海工団連合会が取り上げられ、それぞれの成立経緯や組織の成員の社会的背景が検討されている。

衛藤君はまず、低技能の上海労働者の二つの類型を指摘している。ひとつは、江北出身の女性たちからなる工場労働者、もうひとつは江北の男性たちならびにその他の地域から流入する男性たちから構成される、人力車夫や港湾労働者などの各種肉体労働者層である。こうした人々は、青幫と呼ばれる「親分—子分関係」のネットワークによって支配されていたのであった。

一九二〇年代半ばの上海においては、奉天軍閥によって構築された権力秩序が江浙戦争によって動揺を余儀なくされていた。共産党による労働者の動員は、そのような権力秩序の動揺に乗じて行われたのであった。一方、国民党上海執行部、ならびに共産党に対抗する広東機器工会派が設立に関与した孫文主義学会や西山会議派などの反共組織もまた労働者の動員に大きな役割を果たした。本章では、上海労働者の組織化と動員が、このような革命党同士の指導

権争いのなかで進められた過程が詳細に描かれている。衛藤君によれば、上海総工会は、共産党が広東機器工会派の上海工団連合会に対抗するために組織したのであり、また共産党の動員組織である滬西工友倶楽部は、失業の危機に直面した紡績工場の工頭の連合組織という性格をもっていた。このような工頭のなかには上海のヤクザ組織と密接な関係をもっていたと推察される人物も含まれており、彼らこそが一九二五年二月のストライキにおける暴力的動員においてもつとにも大きな役割を果たしたという。

そして衛藤君は、従来青幫のゴロツキ団体との政治的レッテルを貼られてきた上海工団連合会に関して、その指導者層の背景について分析し、同会が湖南劳工工会系の指導者と湖北全省工団連合会系の指導者を取り込んだ有力団体であったと指摘している。しかし、この団体は、上海総工会との指導権争いの過程において次第に弱体化し、暴力へ訴える傾向を強めたという。

第六章では、中国共産党による上海労働者の動員が検討されている。一九二二年の動員は、寧波人海員と日華紡績工場労働者を対象としたが、この両者は熱狂的運動の拡大につながらず、共産党からすれば「失敗」した運動であった。同党は香港海員ストライキの上海における再演を試み

たものの、地域の有力な寧波人紳士たちが、青幫ネットワークを通じて調停活動によってこれを阻止した。

次に衛藤君は、一九二五年二月ストライキの実行機関である滬西工友倶楽部が、失業の危機にさらされた紡績工場
の工頭らを主体とした組織であったこと、またストライキの拡大が主として「打廠」と呼ばれる暴力的な工場襲撃によるものであったことを指摘している。このストライキにおける積極的参加者は男工であり、一方、消極的参加者は、男工に代わって雇用された女工を主体としていた。衛藤君のみるところ、共産党が失業男工に対し、女工は日本人に飼い慣らされた奴隷労働者であるとする言説を与えたことにより、男工は女工に対し同情的態度を取りつつ、彼女たち
にストライキを強制することが可能となったのである。また、「打廠」は元傭兵にして元港湾労働者である、紡績工場労働者の工頭が指導したものであり、港湾労働者間の武力紛争をモデルに考案されたものであったという。ゆえにこの戦略は、死傷者を出すほど暴力的なものとなった。

さらに衛藤君は、一九二五年五月一五日の内外綿第七工場の労働者・顧正紅の死亡事件を、国民党上海執行部がいかに利用し、上海ストライキに結実したかを分析している。このストライキは、顧正紅事件を利用した学生動員から始

まった。学生デモ隊に対するイギリス人警官の発砲によって死傷者が出た後、上海総工会や工商学連合会によって労働者、学生、商工業者がストライキへと動員された。衛藤君によれば、運動の積極的推進者は、租界の送電停止措置によって失職した失業者とヤクザ者から構成され、その際、外国資本の工場・企業に雇われていた労働者は、暴力的脅迫によって次々とストライキへの参加を余儀なくされたのであった。

ストライキ労働者の生活は、当初、各種の義援金や比較的制度化された手段（済安会の設立）を通じて集められた生活維持費によって支えられていた。しかし、ストライキに参加する労働者の増加に伴い、生活維持費の調達は困難に陥った。不足分については、より収奪的な方法、すなわち物流を一部復活させてそこに課税しようとする試みや、顧正紅の死に対する賠償金の転用などによって調達されたのであった。他方、工会と糾察隊は、労働者の頭目が各種名目で搾取を行う手段となったという。実際、相当数の拉致、脅迫、暴行、略奪が、上海ストライキ中に発生していた。

このようにして集められた富は、社会の末端に再分配されることなく浪費され、もつとも貧しい人々を苦境に陥れ

た。衛藤君によれば、この最貧困層が耐えきれなくなったとき、略奪とセツトになった暴動が噴出したのであった。この文脈において、一九二五年八月一日に港湾労働者による上海総工会襲撃事件が発生し、これを契機に共産党は上海ストライキの中心であった内外綿工場ストライキの終了を宣言した。

第七章において、衛藤君はまず武漢の労働運動をめぐる諸環境を検討し、次に武漢における国共両党の党組織を考察している。続いて、武漢における国共両党による労働者の動員の方法を具体的に明らかにしている。

漢口は開港後、周辺地域から多くの流動人口を引きつけ、とくに漢口租界の周囲に「原子化された」人々の集団を生み出していった。これらの人々の間で、洪幫と称される「親子分―子分関係」が発達し、武漢のヤクザ社会の基盤となった。衛藤君はまた、武漢地域の重要な不安定要因として、武漢の金融市場の脆弱性を強調している。この市場は地域の金融業者の危うい資金繰りのうえに拡大した市場であり、武漢の金融秩序は、商人・金融業者と政治・軍事指導者との協力によってかろうじて保たれていた。

衛藤君は次に、武漢地域における国共両党の党組織と各労働者団体の関係、および湖北全省工団連合会の指導者の

党派的背景を明らかにしている。両党は、共産党との関わりが深かった漢陽鋼鉄廠と、広東人機械工が多く国民党との関わりが深かった漢陽兵工廠、そして二大鉄道であった粵漢鐵路と京漢鐵路の労働者の間に、動員の協力者を見出した。彼らを中核として湖北全省工団連合会が成立し、同会は武漢の労働運動を大いに盛り上げた。だが、両党と湖北全省工団連合会が一九二三年二月に計画した京漢鉄道ストライキは大失敗に終わり、同会の指導者は、とくに共産党に対して不信感を抱いた。同党に不信感を抱くに至った彼らは、広東機器工会派と結んで共産党の動員活動を妨害するようになり、同党に対抗する工会組織を作ろうと試みた。それゆえ彼らは、共産党から「工賊」のレッテルを貼られることとなった。

続いて衛藤君は、共産党と湖北全省工団連合会の元指導者たちの勢力争いの結末、および共産党が彼らを排除してつくりあげた湖北全省総工会について考察を加えている。一九二五年を通じて、武漢の共産党員は、湖北全省工団連合会関係者と対立を深めた。武漢国民政府時代の到来とともに、共産党は湖北全省総工会を設立すると、その勢いを利用し、かつての湖北全省工団連合会関係者を処刑したのであった。

第八章において、衛藤君は国共両党による武漢労働者の動員を検討している。一九二二年の粵漢鉄道ストライキは、湖北全省工団連合会設立の直接的契機となった。このストライキの背景には広東人鉄道労働者集団と天津人職員集団の対立があった。岳州で広東人鉄道労働者がストライキに立ち上がった後、軍警が彼らを力づくで排除したことに憤った武漢の有力な労働者集団が、このストライキを支援する運動を展開したことによって、運動は武漢へと飛び火した。衛藤君のみるところ、その際の彼らの言動は、彼らの唱える「正義」に同調しない者を皆で吊し上げ、社会的に抹殺することが許されるという感覚に支えられていたのであった。

次に衛藤君は、一九二五年六月の漢口港湾労働者によるイギリス租界襲撃事件を、同年の武漢における政治を左右した事件として扱っている。武漢の党員や学生は、上海の五・三〇事件に刺激され、反帝国主義の言説を武漢へ積極的に拡大し、上海同様の運動を武漢でも展開しようとして試みた。彼らの言説と接触した港湾労働者たちは、「敵」である外国人によって損なわれた「われわれ」のメンツを、自らの英雄的行為によって回復するという物語を自ら作り上げ、租界襲撃に及んだのであった。ただし、衛藤君の見解

では、この時期、「敵」の設定が日本人からイギリス人へと一斉に変化したことからみて、「敵」が誰であるかは実際には重要ではなかった。

続いて衛藤君は、一九二六年から一九二七年までの武漢国民政府時代の労働運動について考察を加えている。まず、この運動の経済的背景として、一九二六年前半からハイパーインフレーションが脆弱な武漢の金融市場を損ない、深刻な市場縮小と大量の失業者を生んでいたことが指摘されている。このような背景のもと、一九二六年末に国民党の北伐軍が呉佩孚軍を武漢から追い出し、国共両党が動員を行うと、武漢では熱狂的な労働運動が急速に拡大した。その積極的参加者の多くは失業者であり、一方、消極的参加者は雇用を失っていないが外部からの脅迫的動員で参加を余儀なくされた人々であった。また、ヤクザ者が工会幹部として運動を牛耳り、糾察隊を結成し、労働運動の名目で各方面から搾取を行う事態が頻発するようになった。さらに、当時の武漢には無職の遊民や食い詰めた兵士が大量に存在しており、こうした人々が運動に便乗し収奪を行っていたという。このような人々が政府の提供する「正義」の言説を利用し、相互に争っていたのである。

このような状況において、共産党の労働者動員組織であ

る湖北全省総工会は、独自の軍事集団として振る舞った。同総工会の指導下にある各工会、糾察隊、労働童子団などの行動も規律が乱れており、その恣意的な暴力行使が次第に顕著となった。

事態をほとんど收拾できなかった武漢国民政府は、一九二七年五月に生じた、北伐軍指導者による二つの反共クーデターを黙認した。政府のこのような態度をみた人々は、風向きの変化を察知し、これ以降、北伐軍の兵士が工会を占拠し財物を奪う動きが相次いだ。かくして武漢国民政府時代の労働運動は急速に勢いを失い、労働者は運動から離れていった。

終章において、衛藤君は事例検討の結果得られた知見を要約したうえ、広東、上海、武漢の三地域に展開した労働運動は、運動の社会的基盤と思想的基盤、また運動の発生・拡大・収束メカニズムにおいて共通性がみられると主張している。

社会的基盤とは、独身男性を主体とする失業人口層である。広東、上海、武漢の三地域は、アヘン戦争後に港湾都市として急速に経済発展を遂げ、周辺地域から失業者を引きつけていた。こうした社会層に「親分―子分関係」が浸透し、地域のヤクザ社会の基盤を形成していたという。

思想的基盤は、匪賊的な「正義」たる「殺富濟貧」の思想である。これは、「富者を殺害し貧者を救えば「正義」であるとする観念を根底にもつ。この種の「正義」の言説は、一方において「敵」との暴力的闘争を正当化し、他方において「敵」からの富の略奪を正当化する。また、このような言説は、個別具体的な「敵」に対する英雄的行為によって周囲の評判を得ようとする感情的要素を抱え込んでおり、普遍的な信念や価値体系を欠く。そのため「敵」の設定自体が揺れ動き、運動が全体として一貫性を失いやすいという。

運動の発生は、「原子化した社会」において居場所を失いかけているか、あるいは周縁的立場にある人々のなかから、積極的参加者が現れて政治勢力と協力関係を結び、消極的参加者を脅迫的手段で動員したことによる。積極的参加者として登場するのは、学生および失業者、あるいは周縁的地位から上層社会へ這い上がる人々であった。他方、消極的参加者とは、有職者や所属団体で昇進の見込みがある人々であった。

運動の拡大は、暴力的強制を伴うストライキによって地域の経済活動が打撃を受け、市場が縮小し、失業者が発生することによっていた。政治勢力の計画したストライキは、

失業者を吸収して拡大し、拡大したことによってさらに広範囲に経済活動を破壊するという悪循環を繰り返していた。

運動の収束は、軍警の弾圧を契機としていた。三地域において生じた労働運動は、運動参加者たちの目的がバラバラで、求心性を欠いていた。それゆえ、話し合いでこれを収束させることは容易ではなかった。過熱した運動を、再び無関心の相にシフトさせたのは、つねに軍や警察の暴力的弾圧であった。しかも、この種の弾圧もまた、運動の合理性を低下させ、投機性を増大させるものであったという。というのも、軍や警察は、時にまったくの放任の態度を取り、時に突如血なまぐさい弾圧を行うという具合であり、運動推進者からすれば、その行動を予測することが困難であったからである。

次に衛藤君は、三地域に展開した運動の差異に言及し、地域の経済圏の安定度と地域政権の性質の違いが運動の差異をもたらしたと主張している。三地域のうち、混乱がもっとも少なかったのは、もっとも安定した経済圏をもち、その軍事政権も相対的に安定していた上海であった。より社会的混乱が大きかった広東では、その軍事政権が頻繁な交代を繰り返し、香港ドル経済圏と連動する広州金融市場も、広東に勢力をもつ軍閥の紙幣乱発のため不安定であっ

た。ただし、広東国民政府時代においては、権力は相対的に安定し、運動も比較的穏やかなものであった。社会的混乱がもっともはなはだしかった武漢国民政府時代の武漢では、金融市場の経済活動が大きく損なわれ、また事実上、中央権力が解体したため、権力が社会に拡散する事態が生じていた。その結果、社会に暴力が蔓延することとなった。

以上の事例から、衛藤君は、当時の中国における「原子化した社会」が、欠乏ゆえの「根源的暴力」(H・アレント)によって特徴づけられた社会であると主張する。さらに衛藤君によれば、当時の中国においては、中間団体内部においても「原子化」の状況が認められる。団体の成員は権威主義的な頭目に服従し、団体内部の人間関係は、上位者が下位者から搾取することを当然とする感覚に基づいていた。政治勢力の動員に積極的に応じるのは、このような既存の中間団体の小頭目たちであり、それゆえ運動の内部には搾取構造が再生産されていたという。

最後に衛藤君は、この種の運動と収奪的な権威主義体制との親和性について指摘している。すなわち、「原子化した社会」は相互不信によって特徴づけられ、公的なる政治の概念を欠き、「敵」との対話を好まず、むしろ「敵」を暴力的に排除することを好むのであり、かつ資源の欠乏の

度合いによって、「敵」から搾取を行おうとする動機も強まるような社会であり、その限りにおいて収奪的な権威主義体制と親和性をもつというのである。

評価

本論文はよく練られた日本語で書かれ、論旨も明快である。この論文の評価すべき点として、とくに以下の三つの点を指摘できる。

第一は、一九二〇年代の中国における労働運動の歴史を、空間的に大きな展望のもとに置いた点である。この問題領域においては、細部に執着する伝統的な中国史家の態度、および近年における新たな資料の利用可能性の増大によって、研究者たちは比較的狭い地域の政治権力や社会の動態を濃密に描き出すことに力を注いできた。しかも、そのような試みは、ほとんど他地域の研究との比較の視点を欠いたまま行われてきた。このような姿勢が、中国近現代史の研究を新たな段階に引き上げたのは事実であるが、それは広い視野の喪失と引き換えであった。だが、衛藤君の研究は、異なる研究者によって扱われてきた異なる地理的空間を積極的に結合する（それらは現実に社会的・経済的ネットワークによって結び付いていた）ことによって、一九二〇

年代における中国の複数の地域で展開された労働運動に共通する諸要素を抽出し、さらにそれらを大衆社会論やE・フロム、H・アレントなどの提示する知見と接合することによって、広い視野と比較の視点を回復しようと試みている。このような姿勢は高く評価されてよい。

第二は、本論文が時間的にも、一九二〇年代における中国の労働運動をより大きな展望のもとに置いた点である。この論文は一九二〇年代という限定された時期を扱いながら、中国社会における熱狂と暴力の拡大（そして突然の無気力状態への転化）、人々の動員されやすさと無軌道ぶりといったその後の中国史にも繰り返される政治的・社会的現象への興味深い洞察を含んでいる。たしかに、中国における暴力を伴う熱狂という社会現象は一九二〇年代にのみ発生したのではなく、時代が下るにつれ、むしろその規模は拡大し、深刻さは深まっていったようにみえる。少なくとも本論は、中国共産党の政治戦略における民衆の熱狂と無軌道な暴力の積極的利用（および同党による民衆の統御の失敗）が、毛沢東とともに始まったのではなく、それ以前の前同党の戦略のなかにすでに顔をのぞかせていたことを示した。これによって衛藤君は、のちの文化大革命の悲劇につながる諸要素が、中国共産党の誕生直後から現れてい

たことを示唆しているのである。

第三は、本論文が非常に広範かつ緻密な資料の検討に基づいていることである。衛藤君は北京の社会科学院近代史研究所、武漢の湖北省檔案館および武漢市檔案館、広州の広東省檔案館および広東省立図書館文献センター、台北の党史館および国家図書館、香港中文大学図書館、米国のスタンフォード大学フーバー研究所などに足を運び、興味深い資料を数多く発掘し、それらを巧みに記述のなかに取り込んでいる。とりわけ、これまで利用されることの少なかった中国各地の日本商業会議所の報告、総領事の報告、ならびに外国人による見聞録を積極的に利用し、それらの内容を近年公開された国民党の未公開公文書および中国語の地方新聞と突き合わせることで実証性をより高めようとしている姿勢は高く評価できる。当時の広東、上海、武漢におけるさまざまな職種に分かれる労働者たちの生活実態——賃金から階層序列に至るまで、また男女関係から他の集団に対する襲撃の仕方に至るまで——に関する記述も、その包括性と詳細さにおいて従来の研究を大きく上回っている。

とはいえ、本論文にも若干の課題がないわけではない。

第一は、一九二〇年代中国における「原子化された社

会」を生み出し、それを持続させた諸条件に関わるものである。衛藤君は、当時のハイパーインフレーションに端を発する社会・経済秩序の崩壊のなかで大量に析出した食い詰めた労働者たちの経済状況、社会心理学的な状態、および行動様式を克明に描き、彼らが完全にばらばらになった状態ではなく、ある種の特徴を備えた集団によって捉えられている状態を指して「原子化された社会」と呼んだ。これらの諸集団は「親分—子分関係」を内部的特徴とし、相互の対話不能性を外部的特徴としているというのである。そして衛藤君は慎重に、このような状態が歴史的に形成されたものであり、永遠不変のものではなく、時間の経過とともに変化しうるものであると述べる。だが、他方で衛藤君は、熱狂と暴力を伴う社会的混乱は文化大革命の時代にも、さらには二一世紀の反日デモにおいても観察しうる指摘し、一九二〇年代の「原子化された社会」が強力な持続性を備えていることをほのめかしている。ならば、異なる政治的・社会的・経済的諸条件においても現れるそのような持続性は、何に由来するのであるか。いくらかの示唆がなされてもよかったであろう。

第二は、観察の対象に関わる問題である。衛藤君は一般に一九二〇年代における中国の「労働運動」と称されてき

たものなかで、革命勢力が関与し、比較的大きな社会的混乱に導いた事例を広範囲にわたり網羅的に取り上げている。だが、一方で、労働者の伝統的ギルド組織が行った待遇改善を目的とする抗議活動や、YMCAおよびフランス帰りの労働者たちが起こした、どちらかといえば穏健な労働運動は視野の外に置かれている。従来、この問題領域に挑んだ研究者たちが、比較的狭い地域で生じた特定の運動の分析に特化してきたことを考えれば、衛藤君の取り上げた事例の多さは高く評価されてよい。とはいえ、当時の中国で生じたすべての「労働運動」が熱狂と暴力を伴っていたわけではないという事実にも注意が払われるべきであろう。過激な運動と穏健な運動との比較（あるいは後者から前者へ、前者から後者への転換過程の検討）を通じて、中国社会が社会的熱狂と暴力の罫から抜け出せる諸条件も指摘できるかもしれない。読み方によっては、衛藤君の議論がどこか悲観主義的で宿命論的な響きをもっているだけに、そのような可能性も指摘できれば、本論文の価値はさらに高まったであろう。

とはいえ、以上の課題は本論文の延長線上にみえてくる今後の課題といふべきもので、本論文の学術的価値をいささかも損なうものではない。よって、審査員一同は、本論

文が中国の労働運動史研究の画期を成すものであるとの確信から、ここで示された衛藤安奈君の業績が博士（法学）（慶應義塾大学）の学位を授与するに値する学識を示した内容であると認めるものである。

二〇一四年六月二〇日

主査	慶應義塾大学法学部教授・ 法学研究科委員 法学博士	高橋 伸夫
副査	慶應義塾大学法学部教授・ 法学研究科委員	横手 慎二
副査	慶應義塾大学名誉教授・ 法学博士	山田 辰雄